

「子供の研究は個人的でありたきこと」

——某講演會に於ける講話の一節——

倉 橋 惣 三

○太郎は太郎

我々は兒童心理學は學問として研究をする事は出來るけれども、これは何處までも抽象した學問であつて、具體的の一人一人の子供の事實、生活、そのものではない。太郎は何處迄も太郎、花子は何處迄も花子それ自身である。何處を探しても謂ゆる兒童心理學にピッタリ合ふ様な子供は居るものではない。そこで、子供の研究は何處迄も個人個人について其の具體的事實をとらへなければならぬ。一體學問は、世の中の事實があつて其處から生れ出たものであつて、一つの學問があつてその論理に従つて世の中の實際の事實が出て來たものではない。それ故、我々は、子供を取扱ふ場合に「兒

童心理」と云ふ様な學問を尺度ものさしとして之を以て實際の事實——子供の實生活——をはかつては誤る事が多い。例へば此處に棕櫚の樹がある、すると其の葉が長いと云ふ、けれどもその長いとか短かいとか云ふのは、尺度ものさしを持つて世の中をあるいて居る人の話で、棕櫚の木にとつては其自身が絶対に棕櫚の木であつてあの獨特の葉を、あの様を持つて居るのである。幾何學では正方形とか三角形とか云ふ、しかしこの學問上の形は何處にも存在してはゐない、抽象的のものである、實在するものは正方形でも三角形でも（幾何學上謂ゆる）なく石は石、貝は貝でそれ自身に獨特の形をもつて居るのである。すると人は幾何學上の正方形なり三角形なりを實物の中に探し出さうとする、しかし探

し出せない、そこで實際ある形體を例外であると云つてしまふ。しかし本當は事實あるものがそれ自身あるもので、むしろ、幾何學上の形が例外なのである。これと同じく、我々が子供に對する時にも、なまじい^{なまじ}に兒童心理などと云ふ考をもつて居る人は、ともすればこれを尺度^{もんさく}として子供をはかる、そして實際之に全く合する様な子供は居らないから、そこでよく「例外」と云ふ言葉をつかふ。これは實に大なる誤りで實は兒童心理の謂ゆる子供——抽象したるもの——が例外なのである。太郎は太郎、實に置きかへる事の出来ない太郎それ自身で太郎にびつたり合ふ兒童心理はないが、しかし太郎と云ふ子供は存在の事實である。其處で、子供の取扱ひは、實に、一人一人、その個人を絕對に價値あるもの、かけがへのないものとして見て行かねばならぬ。

○個人性を認めること

如何にすれば太郎を太郎そのまゝに見て行く事が出来るかと云へば子供の個人そのものを認めるためには先づ子供に對する我々大人が自己の個人性を認め得る人であらねばならぬ（私は個性と云ふ言葉を用ひたくない何故なら在來用ふる個性と云ふ事は十人十色な人間性をこくわづかの部類にわけてそれにはめ様とするからである。私は地球上に生存する人類の數だけ個性はあると思ふ、一人も同じ人間はをらない、そこで特に私は個人性と云ひたい）私は絶対に私である、長所もある短所もある、しかしその長、短と云ふのはやはり尺度をもつて來てはかつた時の話で存在の事實として私は私なのである。たとひ駄目だからと云つても私のかはりに誰か他の人をもつて來れば、それは私ではなくなつてしまふ、この意味で實に私は無比^{ユニーク}な存在なのである。それ故先づ自分としての存在を充分尊重し、之を認めると云ふ事が大切である。かのカントは、「如何なる場合にも人間を

手段として用ふる事は出来ぬ」と云つて居るが、更に「手段として用ひ得ないばかりでなく個人の存在の目的そのものを置換へる事も出来ない」と云へると私は思ふ。自己を最も尊重し得る人にして初めて他の個人性を認め得るので自分の個人性の貴さを意識しない人にとつては、甲人も乙人も丙人も一向區別がつかず、丁度路傍の礫いしころが、たゞ同じ様な形してゴロゴロ轉つてゐる様に見えるのと同じ事になるであらう。

○自分に結びつけて

然して自己の個人性を認め従つて他人をもまたそれ自身無比ユニークなものとして認め得たと云ふこれだけでは誠に物足らないと思ふ。これだけでは「彼も人、我も人」と云ふだけの話で、絶対無比の人間がたゞ集合したと云ふ事にすぎない。更に、その認めた個人の人格が自己と云ふ主観に結びついて來て、其處エモーショナルに感情的な客觀對主觀の關係が成立し

て初めて個人尊重の意味が生ずるのである。即ち無味乾燥な實體の集合でなしに、うるほひある人間の生活が生ずるのである。こゝに於て子供を具體的存在の事實として認めたと云ふばかりでなくその實在を愛すると云ふ事になつて來る。愛すると云ふ事は換言すれば「自分に於て認める」と云ふことで、その認めるのが他人ではなく何處迄も自分なのである。客觀ではなくて我と云ふ主觀なのである。この自己に於て認めると云ふ事は、子供をたゞ單なる研究の對象として見て居る様な場合には、決して出來るものではない、少くとも自分がその子供の生活の中には入り込んで行つた時に出來得るものである。それ故に、小學校なり幼稚園なりで何年も同じ子供を受持つて居る先生は、その受持の子供のどの兒についても駄目な兒と云ふ様な感はもつ事が出來なくなる。それはその各々の絶対ユニークな所が承認せられて居るからである。しかし、子供の個人性を一番よく承認する事の出來

るものは何と云つても親である。實に自然はよくしたもので、どの子も自分を承認して呉れる人を二人づゝもつて居る。親に於て子供は最もよく其の絶對なる個人性を承認されるのである。親と子の關係は何物も之をうばふ事は出来ない、「あの人は親としての資格がない」とか「あの子は低能で子として持つ價值がない」とか云ふ事を聞く事があるが、これは親と子とのその絶對の個人對個人の立場を無視して何か外の尺度をもつてはかるために生ずる批判であつて、父と母とその子供達との間の關係は、資格があるもないも駄目であつてもなくつても、其れ自身それは親對子のはなるべからざる關係のある事實の存在なのである。それ故客觀的には、たとひ、どんなに謂ゆる、わ、い、子でもその子の親にとつてはやはりその個人性を承認し得るのである。即ち獨り子は、この二人の——

父と母——人格承認者を獨占し、五人六人の兄弟ある人は兄弟が一緒になつて其の父と母と云ふ承

認者を共有して居るわけである。これが實に自然の妙とでも云ふか、この世の中のよく出来て居る所で、これでこそ、どの子供も幸にその個人性を認められて居るのである。

○平凡の價值

近頃天才教育、早教育と云ふ事をよく云ふ、天才と云ひ凡才と云ひ、これまた一つの標準をおいてそれを尺度としたもので、丁度少しも繪のかけない人には少しでもかける人が皆天才と見え、又巧みな人から見れば誰もが凡人と見える様にその標準とする所の如何によつてどうにも變り得るものである。

そこで、親が子供の個人性を承認する場合にも何か特殊な優秀な點をもつてゐなければ何だか駄目な様に思ふ事は、親のためにも又子供のためにも誠に不幸な事である。富士山が高いからと云つて外の山々が皆駄目な様に思はれると同じ様に我

々があまり優秀と云ふ事にはかり氣をとられてそのために個人性そのもの、價値を認め得なくなる事は決して幸な事ではない。平凡の價値とでも云ふか、否、平凡とか優秀とか云ふ尺度をはなれて、親は子の個人性を、先生は生徒の個人性を、またお互同志友達は友達の個人性を承認して、人間としてうるほひある生活をする事が實に大切な事である。

石川五右衛門の子供は不幸であると人は云ふ、貧民窟に生れた子供は可愛相だと我々は思ふ、しかし五衛門とその子五郎一との關係、又貧民の子とその父母の關係は、實に親と子であつてそれ自身、もうどうする事も出来ない絶對の事實である。

いつも、甘いものと鹽からいものばかり食べてゐる人の舌は麻痺してしまつて普通の味がわからなくなつてしまふ様に、人間を賢愚の二つにわけてしまつて、普通の個人性を承認し得ない様では

困る、しかも自然に存在する無限の事實を我々人間が浅い知識でつくり出した、いくつかの法則の中に何でもかでもあてはめてしまつて、それに合はぬ事實は例外であると斷定してしまふ事は如何にも傲慢なやりかたである。

どうか我々は、この具體の子供一人一人を尊重しその個人性を承認して行きたいものである。ここにも、母たる人がどうか「兒童心理」と云ふ學問で子供の實生活の事實をはかつてそのために一人一人の子供の折角もつてゐる無比ユニークのものを普遍的なものとして取扱つてしまふ事のない様に望むのである。

(筆記……文責記者)